

# 第41回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム



日時 2021年10月24日(日)

Zoomによるオンライン開催

✚ Zoomへのリンクは、大会一週間前に会員用メールマガジンにてお送りします。

✚ 大会参加費は無料です。

# 第41回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月24日(日)

9:30~ 10:00	<b>Zoom 開室</b> 開会の辞
10:00~10:45	<b>研究発表1</b> 『新ウェールズ語聖書』(1988)の言葉遣いに見られる、現代性と、伝統の継承性— モルガン/デイヴィス訳聖書(1588/1612)との比較対照から分かること 司会 森野 聡子 発表者 小池 剛史
10:45~11:30	<b>研究発表2</b> ケルト語派の音変化の相対年代とケルト語派諸言語の系統関係 司会 小池剛史 発表者 中野 智宏
11:30~11:45	休憩
11:45~12:30	<b>研究発表3</b> フランス考古学におけるケルト人 司会 辺見 葉子 発表者 梁川 英俊
12:30~13:15	<b>研究発表4</b> Tolkienの「不死の楽園」再考 Part 2 司会 米山 優子 発表者 辺見 葉子
13:15~13:30	総会
13:30~14:00	休憩
14:00~17:30	<b>日本ケルト学会創立50周年記念シンポジウム</b> 「これまでのケルト学、これからのケルト学」 全体司会 梁川 英俊
	<b>発表1</b> 出版物を通して見る日本ケルト学会の50年 発表者 梁川 英俊
	<b>発表2</b> 「日本ケルト学会」を振り返る 発表者 永井 一郎
	<b>発表3</b> ブリテンにおけるケルト学——ヴィクトリア朝 のケルト学と現在のウェールズ学の比較から 見えてくること 発表者 森野 聡子
	<b>発表4</b> ケルト懐疑主義その後 発表者 常見 信代
17:30	閉会の辞

## 日本ケルト学会創立50周年記念シンポジウム

### The 50th Anniversary Symposium of the Japan Society for Celtic Studies

#### 「これまでのケルト学、これからのケルト学」

#### Celtic Studies: the Past and the Future

##### 趣旨説明

今年2021年は日本ケルト学会にとって、前身の「ケルト研究会」の創設から数えて50周年の節目の年に当たります。これを本学会や日本のケルト学の「来し方行く末」を考えるひとつの機会と捉え、本学会の名誉会員やベテラン会員をパネラーとするシンポジウムを開催することにしました。

日本ケルト学会は、いうまでもなくケルト学の分野における日本で唯一の学会です。けれども、わが国には欧米のようなケルト学を専門とする学科を有する大学や高等教育機関は存在しません。つまり、ケルト学の専門家を養成する機関のない国におけるケルト学の唯一の学会——それが本学会の客観的な位置づけだと言えるでしょう。

こうした特殊な条件下で、本学会の先達たちはどのような問題意識を持って、いかなる形でケルトに関する研究を行ってきたのでしょうか。また現在本学会が抱えている問題点はどのようなものなのでしょうか。さらに、日本で唯一のケルト学の学会としてこれから何を課題とし、どのような方向に進んで行けばいいのでしょうか。シンポジウムでは本学会に関わる諸問題について、パネリスト各々の立場から忌憚のない意見を交わしてみたいと考えています。討論では会員の皆様からの積極的な発言を期待しています。ご一緒にこれまでの日本ケルト学会を振り返りつつ、その将来を考えていきましょう。

(文責・梁川 英俊)

## シンポジウム発表 1

### 出版物を通して見る日本ケルト学会の50年

#### 50 Years of the Japan Society for Celtic Studies Through Its Publications

発表者 梁川 英俊

日本ケルト学会(Japan Society for Celtic Studies)の前身は 1971 年に設立された「ケルト研究会」である。言語学者の水谷宏氏が中心となって組織されたこの研究会は、比較言語学者の蛭沼寿雄氏、土居敏雄氏、吉岡治郎氏を主なメンバーとし、研究誌『ケルト研究』(Studia Celtica Japonica) を第 20 号(1985 年)まで刊行する。

1979 年からは日本でケルトに関心を持つ学者たちが集合する研究大会として「日本ケルト学会議」(Japan Celticists Society) が年一回開催されるようになり、会議報告が『ケルト研究』や 1978 年創刊の『ウェールズ語研究』(*Cylchgrawn Astudiaethau Cymraeg*) に掲載されるようになった。『ケルト研究』は、1988 年に大久間慶四郎氏を中心に復刊され、第 9 号(1997 年)まで刊行された。

1994 年、それまで研究大会の名称であった「日本ケルト学会議」を組織名とする学会組織が立ちあげられ、1996 年には日本ケルト学会議の機関誌として『ケルティック・フォーラム』(*Celtic Forum*) が創刊される。日本ケルト学会議は 2004 年に日本ケルト学会と改称され、現在に至っている。本発表では「ケルト研究会」から始まる本学会の研究史を、機関誌である『ケルト研究』や『ケルティック・フォーラム』を繙きながら振り返ってみたい。

## シンポジウム発表 2

### 「日本ケルト学会議」を振り返る

#### Looking back at “Japan Celticists Conference”

発表者 永井 一郎

「日本ケルト学会」は「日本ケルト学会議」を引き継ぎ、さらに名称変更をして今日に至っています。引継ぎから 27 年、名称変更からは 17 年になります。私はこの2つの変革に世話人としてかかりました。

50 周年を記念して本学会の「これまで」と「これから」を議論するためには、これらの変革を一度振り返っておくことも無駄ではないだろう、そう考えて、当時の学会の状況をお話します。ただ、手がかりはニューズレターの記事と私の記憶に限られ、後者は極めて頼りないことが分かっていますので、報告内容は限られた、また偏ったものにならざるを得ません。こんなこともあったそうなどいう程度にお聞きくだされば有難く思います。

内容は以下の4つに分かれます。

- (1) 水谷宏先生が創設、運営された「日本ケルト学会議」の特徴
- (2) 「日本ケルト学会議」の引継ぎと組織変更
- (3) 「東京研究会」の活動
- (4) 「日本ケルト学会」への名称変更

### シンポジウム発表 3

#### ブリテンにおけるケルト学

——ヴィクトリア朝のケルト学と現在のウェールズ学の比較から見てくること——

#### **Celtic Studies in the British Context: a Comparison between the Victorian Celtic Studies and Today's Welsh Studies**

発表者 森野 聡子

19 世紀後半はヨーロッパでケルト学が学問として確立する時期である。この発表では、当時のケルト学がどのような分野やピックを対象としていたのかを、ヴィクトリア朝ブリテンの状況を中心に確認するとともに、第二次世界大戦後、こうした包括的なケルト学がいかに継承されたのか、あるいはされなかったのかを、発表者のウェールズ大学での留学体験等をもとに考察する。そして、「ケルト」というパラダイムが、地域研究として展開されてきたウェールズ学にどのような可能性をもたらすことができるのかについて議論を進めたい。

### シンポジウム発表 4

#### ケルト懐疑主義その後

#### **Celtoscepticism and Post-Celtoscepticism**

発表者 常見 信代

ブリテンやアイルランドにラ・テーヌ様式の物質文化やケルト諸語が残されたのは、鉄器時代に中央ヨーロッパからケルト人が移住したためというのが長きにわたる定説であった。ところが、こうしたケルト像は「神話」に過ぎないと批判され、「ケルト懐疑派」によってケルト人移住説は否定された。それから 20 年以上が経過した現在、新たなケルト像が構築されたであろうか。むしろ「ケルト懐疑派」への懐疑ともいえる問題が起きているように思われる。報告では二つの問題を紹介したい。

その一つは、なにをもってケルト人とみなすかという問題である。近年の考古遺伝学は先史 DNA の解析によってヨーロッパではおよそ紀元前三千年紀にポントス・カスピ海ステップから移住した集団によって人口構成が置き換わり、それ以後、遺伝子構成に影響を与えるような集団移住はなかったことを証明した。したがって、印欧祖語をヨーロッパに運んだのは彼らであり、そこからケルト祖語へ、さらに大陸ケルト語、島嶼ケルト語へと分岐したと推測される。そうだとすれば、アイルランドやブリテンのケルト諸語とケルト人の関係はどのように考えるべきなのか。

もう一つは、「島嶼芸術」‘Insular Arts’の日本における解釈である。ローマの支配拡大に伴って大陸のケルト芸術は衰退したが、その支配下に入らなかったアイルランドや現在のスコットランドでは交易などで入手したラ・テーヌ様式を模倣しながら、それを基調に独特な芸術を創り上げていった。それが全面開花したのが『ケルズの書』などの写本芸術である。‘Insular Arts’には、ケルト芸術の要素が色濃く含まれ、‘Insular Celtic Arts’の発展形と考えるべきではないか。

## 研究発表 1

『新ウェールズ語聖書』(1988)の言葉遣いに見られる、現代性と、伝統の継承性—

モルガン／デイヴィス訳聖書(1588/1612)との比較対照から分かること

**Tradition and Modernity in the New Welsh Bible (1988):  
A report of comparison with the Morgan/Davies Bible (1588/1612)**

発表者 小池 剛史

現在、主なウェールズの教会で用いられている標準的なウェールズ語訳聖書は 1988 年の『新ウェールズ語聖書』(*Y Beibl Cymraeg Newydd*)である。この聖書が出版される前の聖書全訳は、1588 年のウィリアム・モルガン訳聖書、そしてジョン・デイヴィスによるその改訂版(1612 年)である。後者の 1588/1612 年訳聖書は 400 近く版を重ねて、ウェールズ語の標準書き言葉、いわゆる文章ウェールズ語の形成に大きく寄与した。これに対し 1988 年訳聖書の言葉遣いは、近代ウェールズ語期の中に主に話し言葉において生じた言語変化を反映している。他方、1988 年訳聖書序文によると、本聖書の言葉遣い上の意図として、1588/1612 年訳聖書によって継承された文章ウェールズ語の持つ「美」(*rhinwedd/virtues*)を失うことなく、現代ウェールズ人に理解し易い言葉遣いを用いるというものがあつた。1988 年聖書の言葉遣いは、伝統の継承性と現代性という二つの側面を持つということができる。

本発表では、1988 年聖書の言葉遣いを 1588/1612 年訳のそれと比較対照することで、1988 年訳聖書の言葉遣いが持つ現代性と、継承性を具体的に明らかにしたい。今発表では、両聖書の『使徒言行録』の中で用いられる動詞句構造に焦点を当てて比較対照した結果を報告する。

## 研究発表 2

ケルト語派の音変化の相対年代とケルト語派諸言語の系統関係

**The Relative Chronology of Celtic Sound Changes  
and the Genetic Relationship of the Celtic Languages**

発表者 中野 智宏

ケルト語派諸言語の系統関係について、P-/Q-ケルト説、大陸/島嶼ケルト説など異なる仮説が存在し、論争が続いている。また、研究者間で系統関係について想定するモデルが異なるために、ケルト祖語の再構や相対年代にあたって見解の差異が発生している。さらに、印欧祖語から記録に残っているケルト語派諸言語に到るまでの諸々の音変化のうち、どの変化までが完了した段階を「ケルト祖語」と称するかについても合意が取れているわけではなく、従来「ケルト祖語」と称されてきた言語に時代的下位分類を設け、ケルト祖語(Proto-Celtic)から諸言語が分岐し始めた後の段階として「共通ケルト語(Common Celtic)」という概念を導入する考え方もある。本研究は、印欧祖語からケルト語派諸言語までの音変化の相対年代を、特に諸研究者の意見の相違が大きい二重母音と長母音の変化と、それらに関連するほかのいくつかの音変化に絞って論じる。また、そこで得られた知見をもとに、ケルト語派諸言語の系統関係と系統樹モデルを再検討し、通時変化のどの段階をケルト祖語(あるいは共通ケルト語)と呼ぶのが妥当であるかについても考える。

### 研究発表 3

#### フランス考古学におけるケルト人

#### Les Celtes vus par les archéologues français

発表者 梁川 英俊

ブリテンの考古学者によって「ケルト懐疑論」が唱えられてすでに久しい。これに関してはわが国でも少なからぬ歴史学者や文学研究者が紹介しているが、考古学者による客観的な紹介は管見の及ぶ限りない。しかも、こうした紹介の際にしばしば忘れられるのは、「ケルト懐疑論」がブリテンというきわめて限定された地域における議論だということである。当然のことながら、ケルトに関する考古学的研究はヨーロッパのほぼすべての国で行われており、ブリテンの考古学はその一部にすぎない。というよりも、「ケルト懐疑論」は古典古代の文献でケルト人への言及がないブリテンという土地で起こるべくして起こった議論であり、大陸ヨーロッパ諸国がそのまま共有できる議論ではない。

ヘカタエオスからカエサルに至るまで、古典古代の文献がケルト人の居住地として示すのは大陸ヨーロッパ、とりわけ現在のフランスである。したがって、考古学の視点からケルト人を考えるとき、フランス考古学の動向を無視することはできない。本発表では、特に「ケルト懐疑論」以降のフランス考古学に注目し、そこにおけるケルト人の位置づけを考察してみたい。

### 研究発表 4

#### Tolkienの「不死の楽園」再考 Part 2

#### Tolkien's 'Undying Lands': Part 2

発表者 辺見 葉子

Tolkien の Imram(『航海譚』)という詩作品は、中世ラテン語の航海譚 Navigatio Sancti Brendani Abbatis(『聖ブレンダンの航海』)の翻案である。昨年の大会では「Tolkien の『不死の楽園』再考 Part1」として、中世の地図資料を用いつつ、Navigatio で聖ブレンダンが目指す「地上の楽園」および彼が巡ったアイルランド西方の島々が、キリスト教の地上の楽園エデン、セヴイリアのイシドルスを中心とする古典伝統の至福の島、さらにアイルランドの民間伝承の Hy-Brazil と融合し、地図上でも表現されていることについて考察した。

今年の Part 2 では、Tolkien の Imram にも流れ込んでいる、このようなヨーロッパの地上の楽園をめぐるイメージーションを踏まえた上で、Tolkien 自身の「不死の楽園」に関する概念の推移、特に神話作品におけるコスモロジーの変化を中心に検討したい。Tolkien の神話作品では、いわゆる flat earth から spherical/round earth へとコスモロジーが転換したことに伴い、西方の「地上の楽園」はこの世の地表から消え、'straight road' と呼ばれる架け橋を通じてのみ到達可能だとされた。本発表では、Imram にも投影されたこの認識について、「不死の楽園」に関する Tolkien のテキスト分析をもとに具体的な検討を行いたい。

## 2021年度総会

### 議題

1. 2021年度収支決算報告
2. 2022年度予算案
3. その他